

言語活動を通して、思考力、判断力、表現力等を育む指導と評価の在り方についての研究

～生徒の自ら学ぶ意欲に着目した国語科の授業研究～

東洋町立甲浦中学校 教諭 小栗 真紀
高知県教育センター 指導主事 楠瀬 京美

本研究の目的は、中学校国語科において生徒の思考力、判断力、表現力等を育むこと、そして生徒の自ら学ぶ意欲を高めることの二つを目指した授業の在り方を探ることであった。

本研究では課題解決型授業を仕組み、その中で生徒に課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価を行わせた。また、自ら学ぶ意欲を高めるために有効だと考えた学習活動を仕組んだ。そうすることで、基礎・基本の「習得」と思考力、判断力、表現力等の「活用」の相乗作用が働き、分かる授業となるのではないかと考えた。この分かる授業において思考力、判断力、表現力等が育まれ、生徒の自ら学ぶ意欲も向上させることができるということを検証した。

生徒の自ら学ぶ意欲の実態を捉えた授業改善を行うことで、生徒の思考力、判断力、表現力等を育む分かる授業になったと判断したが、手立てとして行った活動については課題が残った。

<キーワード>学習意欲、有能感、自己目標、自己評価、課題解決型授業

1 研究目的

(1) 現行学習指導要領と国の課題

現行の学習指導要領では改訂の経緯として「基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等及び学習意欲を重視し（学校教育法第30条第2項）、学校教育においてはこれらを調和的にはぐくむことが必要である旨が法律上規定されたところである。」と述べられている。文部科学省の示す学力の重要な三つの要素が、前述の学習指導要領でも述べられている「（1）基礎的・基本的な知識・技能（2）知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等（3）主体的に学習に取り組む態度」である。これらの「確かな学力」をバランスよく育むために、学級やグループで話し合い発表し合うなどの言語活動や、他者、社会、自然・環境と直接的に関わる体験活動等が重視されている。文部科学省はこれらを踏まえたうえで、論点整理（2015）で一定の成果があったとしながら、次期改訂に向けての課題として「我が国の子供たちについては、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることなどについて課題が指摘されることや、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識等が国際的に見て相対的に低いことなど、子供が自らの力を育み、自ら能力を引き出し、主体的に判断し行動するまでには必ずしも十分に達しているとは言えない状況にある。」と述べている。また、平成27年度全国学力・学習状況調査の報告書では中学校国語科において「伝えたい事実や事柄について自分の考えを表してはいるが根拠を明確にして書く点に、依然として課題がある。」「目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出してはいるが、それらを基にして自分の考えをまとめる点に、依然として課題がある。」ということが明らかにされている。

これらのことから、「知識技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」と「主体的に学習に取り組む態度」の二点に課題があるということなのではないかと考えた。

(2) 高知県の課題

高知県の学力における課題についても、全国学力・学習状況調査と高知県学力定着状況調査の結果から、思考力、判断力、表現力等について国の課題と同様の傾向が見られる。

前述した一点目の思考力、判断力、表現力等について高知県の中学生は平成27年度全国学力・学習状況調査国語B問題（活用）より「複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えをもつこと」

「文章の構成や展開などを踏まえ、根拠を明確にして自分の考えを書くこと」に課題があることが分かっている。また、高知県学力定着状況調査の結果からは、基礎的・基本的な知識や技能に関しては改善傾向にあるが、中学校国語科においては、「読み取った情報を根拠として示しながら、自分の立場を明確にして意見を書くこと」（２年生）や「画像を選択した理由について根拠を明確にして自分の考えを書くこと」（１年生）などの問題の正答率が低く、根拠を明確にして自分の考えを書くことなどに課題があることが分かっている。これらのことから、高知県においても国の課題と同様に「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」に課題があると言える。

一方、二点目の「主体的に学習に取り組む態度」については、学習意欲を構成する要素を明確にして高知県における生徒の学習意欲の現状を把握することはできなかった。

(3) A中学校２年生の課題

A中学校２年生の課題についても前述した二点について述べていく。

第一に、思考力、判断力、表現力等について、国や県と同様の課題がある。平成27年度高知県学力定着状況調査では問題番号３三「画像を選択した理由について根拠を明確にして自分の考えを書くこと」（二つの画像からウェブページに使用する画像を一つ選び、その画像を選んだ理由を書く）で正答率33.3%、無解答率0%（高知県正答率21.2%、無解答率5.4%）となっており、根拠を明確にして自分の考えを述べることが定着しているとは言い難い現状が明らかになった。このことから、国や県の課題と同様に、思考力、判断力、表現力等に課題があると判断した。また、この調査では「言語についての知識・技能」についての設問で、高知県の正答率が61.1%のところ、A中学校２年生においては41.7%と20%近く正答率が低くなっており、基本的な知識・技能の習得についても課題があることが明らかになっている。

第二に、生徒の自ら学ぶ意欲（学習意欲と同義と捉える）については、昨年度実施したアンケート調査と昨年度の授業の様子から述べていく。１、２学期に一度ずつ行ったアンケート調査では、全員の生徒が「国語が好き、国語の授業が楽しい」と肯定的に答えている。また、授業では「難しい。」と言いながらも学習課題には最後まで取り組む生徒がほとんどであり、最後までやり遂げようという意欲が見られた。定期テストや学力調査においてもそれは顕著であり、記述式の問題にも取り組もうとする様子が見られ、無解答率は低い。しかし、授業で学習課題に取り組む際には、教師に質問する前に過去のノートを振り返るなどの自力解決の行動は見られなかった。また、課題を終えた後、自発的に自分で学習するものを見つけて取り組むことができなかった。これらのことから、生徒たちは、国語が好きだという気持ちをもち、与えられた課題は最後までやり遂げようとするが、自分から課題を見つけて取り組もうとする意欲が低いのではないかと考えた。つまり、生徒たちは学習意欲は一定あるが、学習意欲を表現に結びつけるスキルが欠如していると言えるのではないだろうか。しかし、簡単なアンケート調査や授業の印象分析だけでは、生徒の自ら学ぶ意欲の全体像を把握するには不十分であると考えた。そこで自ら学ぶ意欲について以下詳しく考察を深めていく。

(4) 自ら学ぶ意欲（学習意欲）を醸成する構造

櫻井茂男（2009）は学習意欲を「自ら学ぶ意欲」として、「大学生の自ら学ぶ意欲を測定する項目」と「児童生徒の自ら学ぶ意欲を測定する項目」の質問紙調査を作成している。さらに、その質問紙調査を実施、考察し、その意欲測定尺度の信頼性と妥当性が高いことも確認している。その結果を踏まえて、自ら学ぶ意欲がどのようなプロセスを経て実現されるのかを自ら学ぶ意欲のプロセスモデル（図１）として提示している。この自ら学ぶ意欲のプロセスモデルについて櫻井は「このモデルでは安心して学べる環境によって最終的には動機が実現される（成功する）ものと仮定しており、おもしろい、楽しいという感情とともに、有能感（高次の場合は自律感を伴う）や充実感も高まり、それが欲求・動機レベルにフィードバックされ、さらなる動機づけのプロセスが展開されるものと考えられる。」と述べている。つまり、〈認知・感情レベル〉における「おもしろさと楽し

さ」、「有能感（自律感も含む）」、「充実感」といった分かる喜びを繰り返し感じ、フィードバックさせることが自ら学ぶ意欲につながるということである。

さらに先行研究として櫻井（2009）が作成した信頼性および妥当性も検討済の質問紙調査を基にした、栃木県総合教育センターの「学習に関するアンケート」がある。

(5) A 中学校 2 年生における自ら学ぶ意欲の現状と課題

本研究では櫻井の提唱した「自ら学ぶ意欲」と学習意欲、学力の三要素の一つである「主体的に学習に取り組む態度」を同義であると位置付け、生徒の現状を把握する。現状把握のために栃木県総合教育センターの「学習に関するアンケート」を基にして、中学生が答えやすいように、少し文言を変えて「国語の学習に関するアンケート」（表 1）を実施した。アンケートの結果が図 2 である。アンケートの結果として特徴的であったのが、学習がうまくいったとき、成功したときに感じる感情が多い感情である

「有能感」が他の要素と比較して極端に低くなっていることである。櫻井（2009）は有能感について「成功の原因を能力に帰属したときに生じやすい感情」であると述べている。このことより生徒たちは、学習行動レベルの要素における成功体験が少なく、有能感が低くなっていたために〈認知・感情レベル〉から〈欲求・動機レベル〉につながるためのフィードバックがうまく行われていないのではないかと考えた。

(6) 課題解決のために

ア 思考力、判断力、表現力等を育むために

本研究では国語科における思考力、判断力、表現力等を「言語を使ってどのように思考し、判断し、表現すればよいのかを理解する力」と定義づけ、課題解決の方策を探っていく。

平成 20 年 1 月 17 日に中央教育審議会総会で取りまとめられた答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、思考力、判断力、表現力等について「基礎的・基本的な知識・技能の習得とこ

れらを活用する思考力・判断力・表現力等をいわば車の両輪として相互に関連させながら伸ばしていくことが求められている。」と述べられている。このことから、基礎・基本を「習得」する

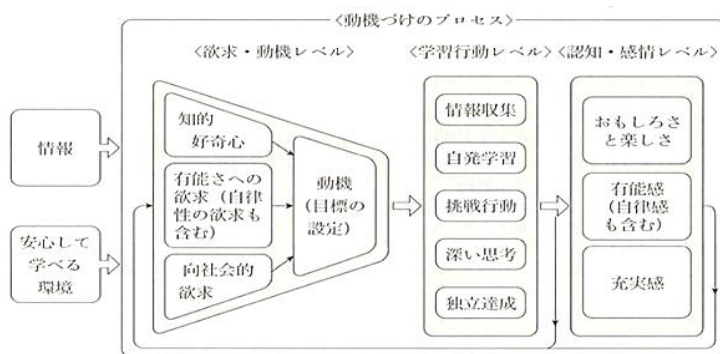


図 1 自ら学ぶ意欲のプロセスモデル

表 1 国語の学習に関するアンケート

国語の学習に関するアンケート				
2年 名前()				
あなたがどのような気持ちで国語の学習をしているのか、正直な気持ちを教えてください。これは、先生が授業をよくするための参考にするためのものです。あとで誰かに知られることも、成績に関係することはありません。それぞれ、4つの中から当てはまるものを1つ選び、○をつけてください。				
	1 あてはまる	2 ややあてはまる	3 あまりあてはまらない	4 あてはまらない
質問項目	1つ選んで○をつけてください。			
例 数学と国語では数学の方が好きです。	1	2	3	4
1 授業でわからないことがあると、先生に聞くことができる。	1	2	3	4
2 もっとうまい解き方や別の考え方はないかと考える。	1	2	3	4
3 毎日、明るく元気に生活している。	1	2	3	4
4 よくわからないことは、わかるまで調べたい。	1	2	3	4
5 いろいろなことを学ぶことは楽しい。	1	2	3	4
6 興味のあることは調べずにはいられない。	1	2	3	4
7 テストがあれば、自分で計画を立てて勉強する。	1	2	3	4
8 自分のもっている能力を十分に発揮したい。	1	2	3	4
9 社会のために役立つような人になりたい。	1	2	3	4
10 勉強面では友達からたよられていてと思う。	1	2	3	4
11 授業では友達と協力して学ぶことも多い。	1	2	3	4
12 先生は学習のことについてほめてくれる。	1	2	3	4
13 今までよりも、むずかしい問題に取り組むことが多い。	1	2	3	4
14 毎日の生活が充実していると感じている。	1	2	3	4
15 もっとかしくなりたい。	1	2	3	4
16 授業では友達と話すことで、より深く考えることができる。	1	2	3	4
17 できるだけ自分ひとりの力で課題を解決しようとしている。	1	2	3	4
18 学校では落ち着いて授業を受けている。	1	2	3	4
19 自分から勉強に取り組んでいる。	1	2	3	4
20 難しい問題に出会うと、よりやる気が出る。	1	2	3	4
21 授業では友達に教えたり、教わったりすることも多い。	1	2	3	4
22 わからないことがあると、いろいろな方法で調べている。	1	2	3	4
23 自分は勉強ができるほうだと思う。	1	2	3	4
24 失敗しても学ぶことはおもしろい。	1	2	3	4
25 疑問やふしぎに思うことは、わかるまで調べたい。	1	2	3	4
26 難しい問題に出会っても、簡単には先生や友達の助けは求めない。	1	2	3	4
27 クラスでは発言しやすい雰囲気である。	1	2	3	4
28 思いやりのある人になりたい。	1	2	3	4

◎ どの質問にも1つずつ○がついているかどうかを確かめてください。ご協力ありがとうございました。

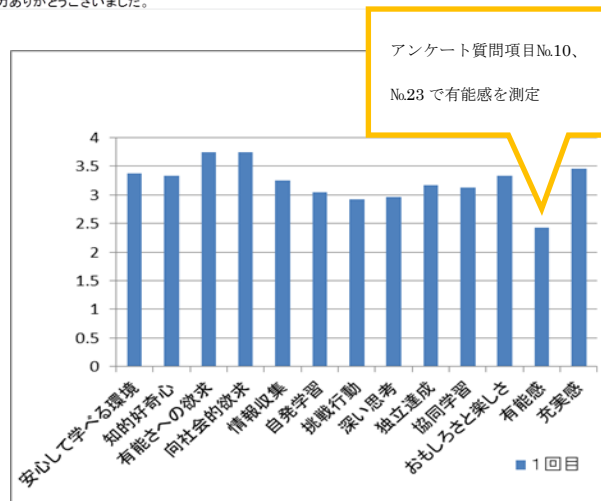


図 2 第1回目アンケート結果

とともに思考力、判断力、表現力等を用いて「活用」という相乗作用で確かな学力を伸ばしていくことが重要であると考えられる。その活用の場面に言語活動が必要であり、言語活動を通して指導が求められている。答申では中学校国語科の「改善の具体的事項」として「自ら課題を設定し、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、他者と相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していく能力の育成を重視する。」と述べられている。また、中学校学習指導要領第1章総則では「各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視する」と述べられているように、課題解決過程で基礎的・基本的な知識・技能を活用する能力を育成することが重要視されている。このことから、本研究では生徒の思考力、判断力、表現力等を育むために課題解決型授業を仕組むことにした。

イ 有能感の向上のために

答申では学習意欲について、「自分に対する自信の欠如も学習意欲が高まらないことの一因でもある」と有能感との関連も述べている。寺井・吉田（2008）はその捉え方として、「やる気が起こらない、やってもどうにもならない、自信もない。」という悪循環を断ち切ることが必要であるということを述べている。答申ではそれに加え、「分かる喜びは学習習慣につながる」とも述べられている。このことから本研究では、分かる喜びを感じる場面は授業であると捉え、生徒にとって有能感を高められる分かる授業こそが自ら学ぶ意欲の向上につながると考えた。生徒の有能感を高めるために、櫻井（2009）は評価の主体に着目し、「基本的に自己評価は他者評価よりも、子どもの自ら学ぶ意欲を高めたり維持したりする効果のあることが知られている。」と述べている。また、中学校学習指導要領第1章総則「第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」に「各教科等の指導に当たっては、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことをふり返ったりする活動を計画的に取り入れるようにすること。」とあり、課題や目標を明確にして学習計画を立て、見通しをもって学習を進めるとともに課題や目標に照らして学習を振り返ることを重視している。このことについて寺井・吉田（2008）は「自ら学び自ら考える力を育成するためには、見通しをもつことから最終の振り返りまでを自律的に営む学習指導が必要となります。」と述べている。このことから、本研究では生徒の自ら学ぶ意欲（有能感）を高めるために課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価を行わせることにした。

2 研究仮説

課題解決型授業を仕組むとともに、その中で生徒に課題や学習の見通しに照らした学習を振り返る自己評価を行わせることで、基礎・基本の「習得」と思考力、判断力、表現力等の「活用」の相乗効果で分かる授業となるだろう。また、その分かる授業において思考力、判断力、表現力等が育まれ、生徒の自ら学ぶ意欲も向上させることができるだろう。

3 研究方法

(1) 検証授業の目的

生徒の思考力、判断力、表現力等を育むためには、基礎・基本の「習得」と思考力、判断力、表現力等の「活用」の相乗効果をねらった、課題解決型授業が有効であるということを検証した。課題解決型授業は、根拠を明確にして自分の考えを述べることを中心に行った。そして、生徒の自ら学ぶ意欲については、課題解決型授業の中で課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価と自ら学ぶ意欲のプロセスモデルに即した学習活動を行うことで、分かる授業となり、生徒の自ら学ぶ意欲を向上させることができるということを検証した。思考力、判断力、表現力等が高まったかについては、生徒の書いたワークシートと意見文で判断した。また、検証授業後に二回目の「国語の学習に関するアンケート」を行い、有能感が高まったかどうかを見た。その結果より、分かる授業となり、生徒の自ら学ぶ意欲が向上したかを判断した。

(2) 単元の概略

検証授業は、「説得力のある表現をしよう」という単元で行う。これは「論証の組み立てを考える」「哲学的思考のすすめ」「反対意見を想定して書こう 意見文」の三つの教材で構成されている。

検証授業の対象は、A中学校2年生13名である。

ア 論証の組み立てを捉える (表2 第1時)

本教材では、人によって考え方が分かれるような話題について、どのように論証を組み立てて説得力をもたせていけばよいのかということを学習させた。ここでは結論とは最終的に伝えたいことで、根拠とは結論のよりどころとなるものであることを捉えさせることにした。それに加えて

根拠と結論が説得力のあるものかどうかを考えさせることにした。その際、根拠と結論の関係として、正しい根拠を提示することと根拠から結論を適切に導くことで説得力が高まることを理解させた。

イ 哲学的思考のすすめ (表2 第2、3時)

本教材は、正解のはっきりしない問題をじっくり考え抜いてみようと呼びかけた文章である。筆者は普段深く掘り下げて考えないようなことの一例として「恥ずかしいとはどういう感情か」という問いを取り上げ、さまざまな角度から論証している。「哲学的思考のすすめ」で生徒たちに捉えさせたのは四点である。一点目は文章の構成である。この文章は大きく分けると序論、本論、結論の三段落構成になっており、序論で問題提起し、本論で論証が組み立てられ、最後の結論へと導かれている。二点目は、本論で適切な根拠を用いて論証を組み立てていること、三点目は論証を組み立てる際に、読者が身近に感じられる具体例を多用していることである。四点目は本論で「反例」として自分とは逆の考えや論理を示し、それに対して反論することで、説得力をもたせていることである。以上のことをこの文章から読み取らせ、説得力のある文章の書き方を理解させた。

ウ 反対意見を想定して書こう 意見文 (表2 第4、5、6時)

本教材では、自分で決めたテーマで意見文を書かせた。その際に「哲学的思考のすすめ」で学んだ文章の構成、適切な根拠を用いた論証の組み立て、読み手を意識した具体例、自分の意見に対する反論と、さらにそれに対する反論を自分の文章で表現できるように思考させた。

(3) 検証授業の方法

意見文を書くにあたり、生徒の国語における思考力、判断力、表現力等を育むためにワークシートを使用することにした(図3)。このワークシートは、第4時で意見文の構成を考える際に使用した。ここではあらかじめ自分の考えを伝えるためにどのような順序で文章を展開していくかという構成の仕方や、どのような具体例を用いて論証を組み立てるかなどを考えさせた。ワークシート

表2 単元構想表

言語活動		多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと。【B(2)イ】			
時	指導事項	意見文を書く	学習活動	指導のねらい	評価規準
1	文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。 【C(1)ウ】		・例文を使って論証の組み立て方について確認する。(論証は、根拠が正しいか、根拠から正しく導かれているかを考えて組み立てる。) ・論証を組み立てる。	○論証の組み立て方を捉える。	関 文を読んで内容や表現の仕方について考えようとしている。 読 文を読んで内容や表現の仕方について考えている。
2	文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。 【C(1)ウ】		・「哲学的思考のすすめ」を読む。 ・筆者が各段落で何を述べているかをまとめ、内容を理解する	○文章の内容を読み、論の進め方を捉える。	関 文章を読んで、内容や表現の仕方について考え、自分のものの見方や考え方を広げようとしている。 読 文章を読んで構成や展開の工夫について、根拠となる部分を上げて自分の考えを持っている。
3	相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること。 【伝国(1)イ(オ)】		・各段落が論の展開においてどのような役割を果たしているかをとらえ、根拠を示して述べる。 ・課題に対する立場や意見の妥当性、文や段落のつながりなどを観点として意見を述べる。		言 文章を読んで、相手や目的に応じて、文章の形態や展開に違いがあることを理解している。
4	自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして文章の構成を工夫すること。 【B(1)イ】		・自分の興味や関心のあることからテーマを選ぶ。 ・意見文の構成を考える。 ・論証の組み立てを考える。	○自分の立場や意見を明らかにして、文章の構成や展開を考える。	関 自分の立場や意見が読み手に伝わるように根拠を明らかにして、文章を書くようとしている。 書 自分の立場や意見を明らかにして、それを表明する部分を文章のどこに置かなど、文章の構成や展開を考えている。
5 6	事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。 【B(1)イ】		・意見文を書く。 ・意見文について話し合い、推敲する。	○自分の立場や意見が効果的に伝わるように根拠を用いたり、根拠を説明したり具体例を用いたりして文章を書く。	関 自分の立場や意見が読み手に伝わるように根拠を明らかにして、文章を書くようとしている。 書 自分の立場や意見が効果的に伝わるように、根拠を説明したり具体例を用いたりして、文章を書いている。

の作成で工夫したのは前時までに学んだ内容を全て盛り込み、既習事項を確認しながらどのように意見文を書いていくかを考えられるようにした点である。ワークシートに沿って考えることで意見文は三段落構成で書くことを理解させた。序論では「今からどんなテーマで述べるのか」という自分で選んだ課題を設定させた。本論では結論に向けて具体例を挙げて根拠を述べ、説得力をもたせながら論証を組み立てさせた。なお、

意見文を書く	
授業の目標……自分の立場を明確にし、分かりやすい構成で根拠を明確にした意見文を書く。	
自己目標……	
テーマの設定 自分自身が考えてみたいことを選ぶ。	
意見文の書き方	
序論（今からどんなテーマで意見文を書くかを述べる）	
本論（結論に向けて、具体例を挙げて根拠を述べ、説得力を持たせながら論証を組み立てる）	
結論（自分が一番言いたいこと、序論で自分がテーマに選んだことをもう一度思い出す）	
予想される反論	
予想される反論に対する反論	
まとめ	
先生から	

図3 ワークシート例（第4時）

論証を組み立てさせる際に読み手が身近に感じられる具体例を用い、予想される反論と、反例を考えさせることで生徒の思考が深まるようにした。そして結論では本論で述べた根拠が結論を導くのに適切であったか、そして根拠が正しいかを確認させながら自分が一番言いたいことを述べられるようにした。個人思考でワークシートに記入させた後は、集団解決としてその内容について話し合う場面を設定し、客観的な視点から文章の構成や論証の組み立てなどについて考えられるようにした。

有能感を向上させるためには課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価を取り入れることにした。全6時間の検証授業、全ての時間で自己目標の設定と自己評価を行う場面を設定した。授業の初めに、学級全体で問いをもち、それを共有して本時の目標を提示した後に、自ら具体的な目標を設定させた。そして、授業の最後には自ら設定した目標に対する自己評価を行わせた。生徒が適切な自己目標を立てられるようにするために、単元の初めに学習の流れとして全ての授業が意見文を完成させるというゴールに向かっていくことを説明した。そのうえで、生徒自身が見通しを立てられるようにするために、1時間の授業の中でも「今何をしているところなのか、この後何をするのか。」が分かるように、授業の流れを黒板に提示した（表3）。さらに自ら学ぶ意欲のプロセスモデルの〈学習行動レベル〉に着目し、それらの学習活動が成功するように以下の取組を授業の中で行った。主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動である情報収集については、意見文の根拠や具体例を考える際に、図書室やPC室で調べ学習を行うことで高められるようにした。自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習をしたりする行動である自発学習については、前述の自己目標を立てさせることと課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価で高めることとした。今よりも少し難しい問題に挑戦する行動である挑戦行動については、600字程度の意見文を時間内に書くことで高めることにした。生徒たちは昨年度の授業で400字程度の意見文を書くことを経験しているので字数を600字に設定した。問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動である深い思考については、ワークシートを活用し、論証の組み立てや具体例の提示、意見文の構成などを考えることで深めることにした。また、意見文を個人で推敲する場面、グループで推敲する場面を設定し、一度完成した意見文を何度も読み返してよりよいものにする活動でも高めることにした。できるだけ自分一人の力で問題を

表3 板書例(第4時)

1. 授業の流れ
2. 復習
3. 目標の確認
4. 自己目標の設定
5. 意見文の構成
6. 話し合い
7. 自己評価
(授業のまとめ)

解決しようとする行動である独立達成については、各授業の自力解決の場面で促し、また、最終的に自分の力で意見文を書き上げることで高めることにした。友達と協力して問題を解決する行動である協同学習については、集団解決、全体発表の場面を多く取り入れることで高めることにした。

表4 第4時 授業の展開

第4時（4／6）					
本時の目標		自分の立場や意見を明らかにして、文章の構成や展開を考える。【B（1）イ】			
本時の評価規準		・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。 ≪B（1）イ≫ ・自分の立場や意見を明らかにして、それを表明する部分を文章のどこに置かなど、文章の構成や展開を考えている。【B（1）イ】			
準備物		教科書 ノート ワークシート（自己評価表をワークシートに含む）			
学習の展開					
時間		生徒の学習活動	指導上の留意点	評価規準 （評価方法）	
導入 10分	学習課題の設定	1. 前時までの復習	・前時までに学んできた論証の組み立て方を使って、自分の興味や関心のあることからテーマを決め、実際に意見文を書いていくことを説明する。		
	問題の提示と問いの共有	2. 本時のめあてを確認する。	自分の立場や意見を明らかにして、文章の構成や展開を考える		
		3. 自己目標を設定する。			
展開 35分	解決活動 自力解決 (20分)	4. 事前に考えてきたテーマをもとに、意見文の構成と論証の組み立てを、反対意見も予想しながらワークシートを使って考える。	・「哲学的思考のすすめ」の最後に筆者が「ほかの問題も考えてみよう。」と投げかけていることを受けて、自分自身の興味、関心でテーマを考えさせる。 ・自分が述べたい結論に導くために、どのような根拠を使って表現するのかを考えさせる。	・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。 ≪B（1）イ≫ ・自分の立場や意見を明らかにして、それを表明する部分を文章のどこに置かなど、文章の構成や展開を考えている。 【B（1）イ】 （観察、発言、ワークシート）	
	集団解決 (15分)	5. 個人で考えた意見文の構成と論証の組み立てについてグループで話し合う。	・「根拠が正しいか。」「根拠から結論が正しく導かれているか。」という観点で話し合いをさせる。また、予想した反対意見についてでもここで意見交換させる。 ・協同学習で互いに意見を述べ合うように机間指導していく。		
まとめ 5分	まとめ 振り返り	6. 本時のまとめを、自己目標に対する評価と合わせて記述する。	・本時で学んだことを感覚で終わらせるのではなく、言語化させる。 ・「頑張った」などという評価ではなく、自己目標に沿った自己評価となるように指導する。		

表5 第4時 評価指標

◆第4時（4／6）				
目標		自分の立場や意見を明らかにして、文章の構成や展開を考える。【B（1）イ】		
[評価規準]		開・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。≪B（1）イ≫ 書・自分の立場や意見を明らかにして、それを表明する部分を文章のどこに置くかなど、文章の構成や展開を考えている。【B（1）イ】		
学習内容・学習活動	評価方法	おおむね満足（B）	十分満足（A）	指導の手立て（C）
・事前に考えてきたテーマをもとに、意見文の構成と論証の組み立てを、反対意見も予想しながらワークシートを使って考える。	観察 ワークシート	開 意見文のための根拠や具体例を考えようとしている。 書 自分の立場や意見を根拠を明らかにして文章の構成や展開、予想される反対意見やそれに対する反論をワークシートに書いている。	開 意見文のための根拠や具体例を様々な方法を使って考えようとしている。 書 自分の立場や意見を根拠を明らかにして文章の構成や展開、予想される反対意見やそれに対する反論を複数ワークシートに書いている。	開 根拠や具体例を考えるためにはどんなものを使えるかを提示する。 書 自分が述べたい結論に導くために、どのような根拠を使って表現するのかを考えさせる。
・個人で考えた意見文の構成と論証の組み立てについて話し合う。	観察 ワークシート 発言	書 話し合いを通して、他者の考える論証の組み立てを知り、自分の意見文の構成に生かしている。	書 他者の考えを知り、様々な視点から根拠となる内容や表現を総合して、自分の意見文の構成に生かしている。	書 話し合いの中で、説得力を感じた意見を書き出させ、自分の意見文の構成に生かせる部分がないか考えさせる。

C評価の作品は自分の主張の根拠を本論で述べているが、それが最終的な結論の根拠となっていなかった。また、自分の主張に対する反論を予想して書いているが、それに対する反論がなく、結論では予想した反論に自分の主張が流されてしまい、本来自分が主張したかったことと結論が

解決しようとする行動である独立達成については、各授業の自力解決の場面で促し、また、最終的に自分の力で意見文を書き上げることで高めることにした。友達と協力して問題を解決する行動である協同学習については、集団解決、全体発表の場面を多く取り入れることで高めることにした。

4 結果と考察

(1) 思考力、判断力、表現力等について

ア 結果

ここでは結果について生徒の書いた意見文を中心に述べていくが、生徒の思考の深まりはワークシートを使った第4時で見られるので、第4時(意見文の構成を考える)の授業の展開(表4)と設定した評価指標第4時(表5)、第5時(表6)を提示した。

第5時の評価指標に照らして意見文を評価すると授業の様子から関心・意欲・態度については、全ての生徒がおおむね満足(B)あるいは十分満足(A)であった。生徒は意見文を書くために作成したワークシートをもとにしながら、論証の組み立てを考え、具体例を挙げて文章を書こうとしていた。

書くことについては、6名の生徒が十分満足(A)で6名の生徒がおおむね満足(B)1名の生徒がCの評価となっている。A評価、B評価となった生徒については、表4の展開で、ワークシートを活用して思考した文章の構成や論証の組み立て、具体例を用いた根拠、反例をどのように意見文として表現すればよいのかを判断し、自分の意見文として仕上げることができていた。このことから、A評価、B評価の生徒は国語科における思考力、判断力、表現力等を身に付けることができたと判断した。A評価の作品は論証を組み立てる際に、正しい根拠を複数示し、その根拠から結論が導かれていた。また、自分の主張の根拠として挙げている具体例や事実に客観性があることから説得力があると判断した。自分とは逆の考えや論理とそれに対する反論も本論の中で述べられており、それが反例として意見文の説得力を高めていた。B評価の作品は、論証を組み立てて根拠と結論を述べているが、根拠が主観によって述べられており、客観性が乏しいため多角的な視点があるとは言えない意見文が多かった。しかし、意見文全体を見た場合、論証は組み立てられており、意見文として成立しているのでおおむね満足であると判断した。評価指標に基づいてA評価、B評価の意見文については上記のように判断したが、筋道を立てて論を展開することについては課題もあり、次項で考察していく。

解決しようとする行動である独立達成については、各授業の自力解決の場面で促し、また、最終的に自分の力で意見文を書き上げることで高めることにした。友達と協力して問題を解決する行動である協同学習については、集団解決、全体発表の場面を多く取り入れることで高めることにした。

C評価の作品は自分の主張の根拠を本論で述べているが、それが最終的な結論の根拠となっていなかった。また、自分の主張に対する反論を予想して書いているが、それに対する反論がなく、結論では予想した反論に自分の主張が流されてしまい、本来自分が主張したかったことと結論が

変わっていた。意見文を書く前段階では、ワークシートに根拠や結論を論のねじれなく書けており、自分の主張に対する反論や、それへの反論も記述できていたが、実際に文章にしていく際に、結論が変わってしまっていた。

イ 考察

生徒の意見文「アオリイカを釣るには春と秋どちらがいいか」(表7)を例に用いて、A評価、あるいはB評価となった生徒がワークシートをどのように活用し、意見文を書いたかを考察する。

この意見文は文章の構成が三段落となっており、ワークシートの内容をもとに序論、本論、結論それぞれで述べるべきことが述べられている。論証の組み立てについては傍線①と傍線②で自分の結論に合う適切な根拠を述べる事ができている。この生徒は、客観的な事実を根拠としてあげており、この点からA評価であると判断した。読み手を意識した具体例としては、意見文全体を通して「釣り」という身近な例を取り上げている。自分の主張に対する反論は傍線③で述べ、傍線④でその根拠を述べる事ができている。そして傍線⑤では、反例を示し、その根拠も述べている。

このように、A評価、B評価となった生徒はワークシートを使って思考したことを、意見文を書くことで表現していた。その意見文で、自分で選んだテーマの課題を解決していることから国語科における思考力、判断力、表現力等が身に付いたと判断した。しかし、A評価、B評価となった生徒につ

いても「何を書くか。」という要素については評価規準に沿い、そして評価指標を満たして述べられているが、指導事項「B(1)エ 書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して、読みやすく分かりやすい文章にすること。」と関連した内容については、生徒たちにその力を身に付けさせることができなかった。これは推敲に関する指導事項であるが、生徒たちに、本当に読みやすく分かりやすい文章になっているのかを考えさせることができなかった。表7の意見文では、理由や説明を表す接続の言葉と逆接を表す接続の言葉が交互に使用されており、論が行きつ戻りつしているために、読む人が分かりづらい展開になっている。結論に向かう筋道が読み手に伝わるようにするためにはどのような順序で述べていけば良いか、またそれに伴いどのような接続の言葉を用いて文をつないでいくのか、という論の展開の仕方については今後指導が必要である。推敲の際に論の展開の仕方について視点を与え、考えさせることが重要である。

次にC評価となった生徒について考察していく。C評価になってしまった要因として、自分自

表6 第5時 評価指標

◆第5時(5/6) 目標 自分の立場や意見が効果的に伝わるように、根拠を説明したり具体例を用いたりして文章を書く。 【B(1)ウ】 [評価規準] 関・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。<B(1)ウ> 書・自分の立場や意見が効果的に伝わるように根拠を説明したり具体例を用いたりして、文章を書いている。 【B(1)ウ】				
学習内容・学習活動	評価方法	おおむね満足(B)	十分満足(A)	指導の手立て(C)
・意見文を書く。	観察 意見文	関 自分の立場や意見が読み手に伝わるようにワークシートを基に文章を書こうとしている。 書 学んだことを生かして、具体例を挙げながら論証を組み立て、反対意見を予想して意見文を書いている。	関 自分の立場や意見が読み手に伝わるようにワークシートをもとに、より考察を深めた文章を書いている。 書 学んだことを生かして、多角的な視点から具体例を挙げて説得力のある論証を組み立て、反対意見を予想して意見文を書いている。	関 「哲学的思考のすめ」の文章を提示し、箇条書きしたものをどのように文章化するのか具体的に示す。 書 個別の机間指導で、ワークシートを使って今までの授業を振り返らせながら、意見文を書かせる。

表7 意見文 アオリイカを釣るには春と秋どちらが良いか

僕らは、今からアオリイカを釣るには、春と秋どちらが良いかについて書く。		
僕は、春の方がアオリイカを釣るには良いと思う。①なぜなら春のアオリイカは秋に釣れるアオリイカの倍くらいサイズのだからだ。また、アオリイカは春から夏にかけて産卵をする時期なのでアオリイカの活性も秋に比べて高くなり、アオリイカの食いも良くなる。水中で生活している生物が交尾をして産卵することをスポーニングという。メスが卵を産んだらオスがその卵を守る習性がついている。メスは次のオスを求めて移動するのだ。スポーニングの場所にエギを落とすと必ずオスのアオリイカが釣れる。②百パーセントとは言えないが、エギも重くて遠くへ飛ばせるのが使えるから良い。③しかし秋が良いという人もいるだろう。④なぜなら秋は、春に産まれたイカたちが沖へ出ないので港にいつばいいから小さいのがたくさん釣れるのだ。⑤けど、僕は春の方が良いと思う。なぜなら秋のアオリイカは食べれるサイズが少ないので春の方が良いと思う。あと、イカが小さいのでエギのサイズを小さくしなければならぬ。エギは大きい方がみんな高いと思うけど、実は小さい方が高いのだ。		
これらのことから、僕はイカを釣るなら春が良いと思う。	結論	本論
		序論

身で行った推敲だけでなく、グループで行った推敲の活動が機能していなかったということが考えられる。この活動は、自分では気付かなかった論のねじれや記述の間違い、そして自分の主張に対して、予想される反論とそれを踏まえた反例を考えるという思考活動が的確に行われているかを他者から客観的に見てもらうという意図をもったものであった。しかしC評価となった生徒にとってはこの思考活動が効果的に働かず、自分が想定した反論の方に論が流されてしまっていた。本来ならば、この論のねじれについてグループ活動での推敲で気付かせたかったが、グループでの活動が推敲として機能せず、「いいところ探し」になってしまった。グループ活動の前に、どのような観点で他の生徒の作品を読めばよいかということを全体で確認し、ポイントを黒板にも提示したが、生徒たちは批評的に他の人の意見文を読むことができなかった。生徒たちのグループでの話し合い活動が効果的にならなかった原因として、話し合った内容が残るように工夫しなかったということが挙げられる。話し合い活動は音声言語を用いて行われるため、生徒の話し合いの方向性を短時間の机間指導だけで把握することが難しい。そのため、生徒の意見をカード式にまとめ、話し合いの内容や流れ、推敲のポイントなどが後から見て分かるようにすることが必要だったと思われる。また、批評的に他の生徒の作品を読むためには1年次の既習事項である指導事項「B(1)オ 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすることなど」を想起させることが必要であった。

(2) 自ら学ぶ意欲について

ア 結果

授業後に、「国語の学習に関するアンケート」を実施した。第一回目の結果と第二回目の結果を比較し、示したものが図4である。第二回目のアンケート結果では、全ての要素別平均値が上昇している。特に大きく上昇したのは学習行動レベルの六つの要素（学習に関するアンケートでは、学習行動レベルに協同学習が加わり、六つの要素となっている）と有能感であった。

授業で行った学習活動として、生徒は全ての授業で、本時の目標を提示した後に自己目標を設定することができた。しかし、自分がどのような力を本時に身に付けたいのかを具体的にした目標を立てることができていなかった。また自己評価についても同様に学習内容を書いただけになってしまっているものや、本時の目標の表現を少し変えただけのものが少なくなかった（表8）。13名中9名が具体性に欠けた形式的な内容の自己目標を立てており、目的意識の見える具体的な自己目標を立てた生徒は4名であった。しかしその4名中、3名は授業の最初に提示した本時の目標を踏まえた目標とはなっていないため、本時の学習内

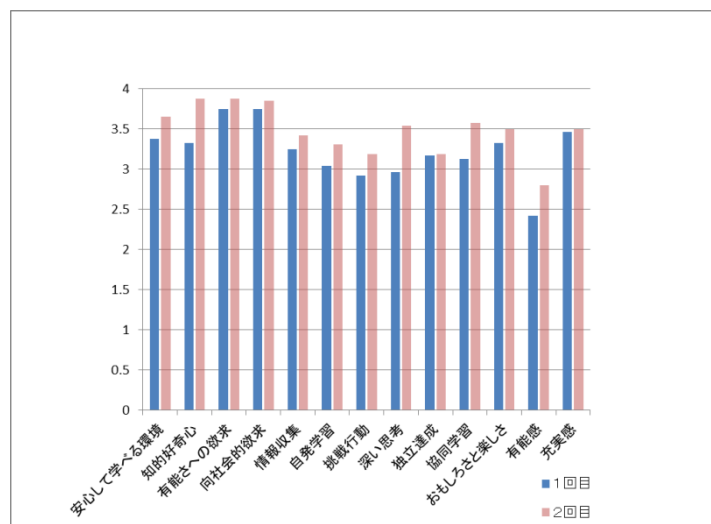


図4 アンケート結果の比較

表8 生徒の自己目標と自己評価

本時の目標：自分の立場を明確にし、分かりやすい構成で根拠を明確にした意見文を書く。	
形式的な内容の自己目標	その生徒の自己評価
みんなが読んでわかりやすい意見文を作る。	時間内に仕上がらなかったけど放課後に書いて誰が読んでも分かりやすい意見文を作る。
根拠を明確にした意見文を書く。	自分の伝えたいことが伝わるような意見文にできた。
しっかりとした構成で意見文を書く。	集中して分かりやすい構成で意見文を書いた。
自分の意見を整理して分かりやすい意見文にする。	自分の考えや意見について整理し、意見文を書くことができた。
みんなに分かりやすく、説得力のある意見文を書けるように頑張る。	分かりやすく、説得力のある文を作れた。
自分の考えをきちんと意見文に書くことをする。	自分の考えを意見文に述べたと思います。
根拠を明確にし、説得力のある意見文を書く。	根拠を明確にし、説得力のある意見文が書けていると思う。書くのに時間がかかっているのを書くスピードを上げたい。
相手に納得してもらえるような意見文を作る。	意見文のまとめがまだまとめてないのでもとめる。
分かりやすく具体例を書き、内容も濃くする。	自分で考えて内容も分かりやすく書けたと思う。具体例も書けたと思うのでよかった。
本時の目標を踏まえていない自己目標	
文体を間違えないようにする。授業中で意見文が終わるようにする。	授業中に終わらすことができなかったのが悔しいです。もっと早く書けるようになりたいです。
主・述の関係と、～たり～たりが苦手なのでそこを気を付ける。	主・述の関係に気を付けて書けたが書くスピードがまだまだなのでその意識をしていきたい。
文の決まりごとを守って主・述の関係に気を付けて書く。	最後まで書けなかったが、自分が思うことを文に書けたのでよかった。
※色付きの生徒は自己目標と自己評価が対応していない。	

容を的確に捉えて、この授業で何を学ぶのか目的意識をもって取り組めた生徒は1名であったことが分かる。生徒の有能感との関連に着目して自己評価を見ると、自分の活動を振り返ったときに「～できた」と肯定的に捉えている生徒は13名中10名であった。また、肯定的な表現をしていない3名についても、今後自分がどのようにしていきたいかという前向きな記述となっていた。

イ 考察

まず、アンケート結果より全ての要素別平均値が向上し、特に課題であった有能感は大きく得点が向上していることから、生徒の自ら学ぶ意欲（有能感）を向上させるための手立てが一定の成果をあげたと判断した。ここでは、その手立ての内容に触れながら考察していく。

情報収集は、意見文の根拠や具体例を考える際に、図書室やPC室で調べ学習を行うことで高められるようにしたが、実際は教室を出て授業中にそれらの調べ学習を行う生徒はいなかった。しかし、ワークシートを書きながら疑問に思ったことや、説得力のある根拠を見つけるために家でインターネットなどを活用して、授業外で情報収集を行っていた生徒が半数いた。また、ある生徒は学級でアンケートをとり、その結果を根拠として述べるなど自分で調べたことを意見文に生かすことができていた。挑戦行動では、全ての生徒が600字程度の意見文を完成させることができた。深い思考では、ワークシートを活用し、論証の組み立てや具体例の提示、意見文の構成を考えることができていた。また、個人での推敲後にグループで推敲し、さらにもう一度個人での推敲を行うことで自分の文章を吟味し、深く思考することができていた。独立達成については、最終的に全員が意見文を自分の力で書きあげることができた。協同学習は、集団解決の場面を多く取り入れたことで意見文についての意見交換をすることができ、読み手を意識して客観的な視点から意見文を書くことができた。そのため、第5時では半数の生徒がA評価となった。これらのことから、〈学習行動レベル〉において生徒が「成功した」と感じるが多かったために、有能感が高まったのではないかと考えた。

思考力、判断力、表現力等を育む分かる授業が生徒の有能感を高めるということから、意見文の評価（書くこと）と有能感の上昇について考えていく。意見文の評価がAの生徒は13名中6名おり、そのうち有能感が上昇した生徒は3名で、有能感に変化のない生徒は3名であった。有能感が下降した生徒はいなかった。意見文の評価がBの生徒は13名中6名でそのうち有能感が上昇した生徒は3名、変化のない生徒が1名、下降した生徒が2名であった。有能感が下降した生徒2名には共通点があった。1名の生徒は仕上がった意見文をグループで推敲する活動において、意見文の内容について他者から「これは意見文というより決意文のようだ。」という指摘を受けたが、時間内でうまく文章を直すことができなかった。もう1名の生徒は国語が好きで自分の意見文に自信をもっていたが、グループの代表としてクラスでの発表者に選ばれなかった。そのため、この2名はグループでの活動で認められたという感情を得ることができなかったために、有能感が下降したのではないかと考えた。評価がCの生徒は1名で有能感は少し上昇したが(図5)、学級の平均値が2.85ポイントのところ1.5ポイントしかなく、他の生徒と比べて極端に低い数値となっている。この生徒にとって検証授業が思考力、判断力、表現力等を育む分かる授業となっていなかったため、他の生徒と比べたときに有能感が極端に低い結果になったと考えた。しかし、この生徒のアンケート結果を見ると全体的には数値が上昇している。少しではある

	有能感	比較
第1回目	1.00	
第2回目	1.50	0.50 ↗
校内平均(第2回目)	2.85	-1.35 ↓

図5 C評価となった生徒の有能感

が、自ら学ぶ意欲が検証授業前よりも高まったことが分かった(図6)。このことから、検証授業が分かる授業とならなかった生徒に対しても、今回の授業が生徒の意欲に影響を与えたと考えた。これは、授業者が「生徒が授業の中で有能感をもてるようにするためには何が必要か。」という生徒の意欲に関する課題を解決するための方策を意識して授業を行ったことが、生徒の認知や感情に影響を与える要因となったのではないかと考えた。生徒が毎時間自己目標を立て、自己

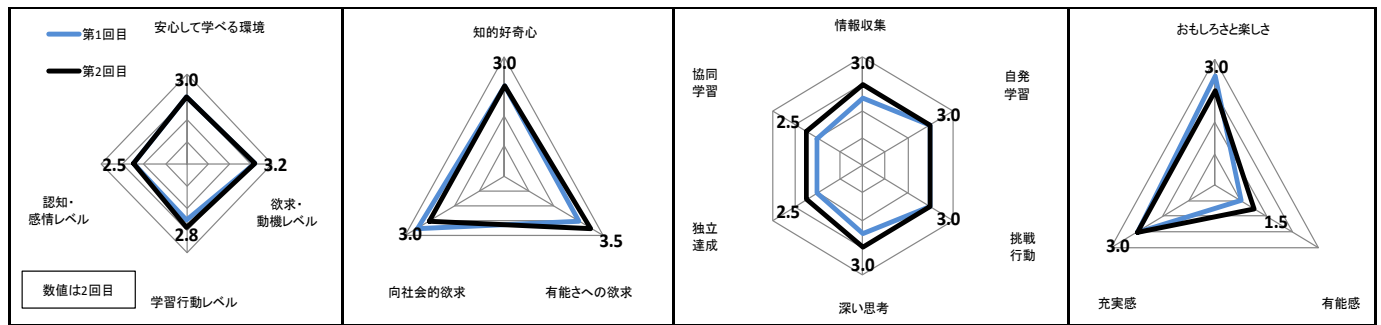


図6 C評価となった生徒の自ら学ぶ意欲

評価をしたワークシートに、授業者がコメントを書く際、生徒の有能感が高まることを意識して肯定的な言葉を選んだ。また、授業中の生徒の活動に助言するときも、一人一人の生徒に寄り添い、丁寧に関わることを大事にした。これら二つに共通するのは、生徒の現状を踏まえて、生徒の活動や感情に丁寧に向き合ったということである。この点については、本研究では生徒の変化に触れ、考察を深めることができていないので、今後学校現場で実践を重ねて検証していきたい。

続いて、課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価について述べていく。この活動については、生徒が振り返りの中で自分が学習したことを記述できたことや、有能感が高まったことなど一定の成果は得られたが、その内容には課題が多く改善が必要である。その点について考察していく。生徒の立てた自己目標と自己評価の特徴から二つの課題が明らかになった。一つ目は、自己目標や自己評価が授業の最初に提示した本時の目標を言い換えただけのものになっており、この活動が形式的なものになってしまったことである。二つ目は、自己目標が本時の目標を踏まえた目標とはなっていないため、授業で何を学ぶのかということを生徒が正確に把握できていなかったことである。課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価がこのような結果になったのは、見通しをもって自己目標を立てることと、その自己目標を踏まえて学習活動を行うこと、そして振り返りとして自己評価を行うという一連の流れを生徒に自覚させることができなかったためではないかと考えた。生徒たちは何のために自己目標を立てたり自己評価で振り返りを行ったりするのかを把握することができず、そのため、本時の目標を捉えて自己目標を自分で立てるということが十分ではなく、自己評価での振り返りにつながらなかったのではないかと考えた。自己目標として具体的に「自分がこの授業で何を学ぶのか。」を考えるためには、時間を十分にとり、単元を通して授業の見通しをもたせることが重要になる。今回の検証授業では本時の目標を提示した後、本時の見通しを提示して個人で自己目標を立てさせた。しかし、それでは本来の課題や学習を見通す活動とはならなかった。また、全ての授業において、生徒一人一人の自己目標を把握して、それを達成させるように授業を行うということも非常に困難である。そこで、授業の初めに問いの共有として問題を提示したあと、クラス全体で意見を出させながら本時の目標を踏まえた具体的なめあてを設定させることで、本時の目標達成に向けて進みやすくなるのではないかと考えた。なお、振り返りとして行った自己評価についても課題がある。それは、生徒自身が本時の学習についてどうだったのかを考えるための、振り返りの視点を与えることができなかったことである。検証授業の第4時を例として挙げると、意見文を書くための思考を深める手立てとして、自分の主張に対する反論を別の立場から想定し、反例を考えさせたことについて、「自分の主張に対する反対意見を想定し、反例を考えることにどのような意味があったか。」という振り返りの視点を生徒に与えるなど、メタ認知の角度から自分自身の学習を振り返って評価させることで、学習の振り返りが生徒たちにとって意味のあるものになったのではないだろうか考えた。

5 成果と課題

(1) 成果

ア 思考力、判断力、表現力等について

- ・課題解決型授業において、全ての生徒が意見文の書き方を理解して、実際に書きあげることができた。
- ・ワークシートを活用することで生徒が自分の立場や意見が効果的に伝わるように根拠を説明したり具体例を用いたりして意見文を書くことができ、検証授業が思考力、判断力、表現力等を育む分かる授業となった。

イ 自ら学ぶ意欲について

- ・「国語の学習に関するアンケート」結果から、生徒の自ら学ぶ意欲における課題が〈認知・感情レベル〉の「有能感」の低さであることを捉え、前段階の学習行動レベルの要素が成功するような学習活動を授業の中に組み込むことで生徒の「有能感」が高まった。このことから、「学習に関するアンケート」で生徒の自ら学ぶ意欲の現状を把握し、自ら学ぶ意欲のプロセスモデルに即した学習活動を授業の中で行わせることで、生徒の自ら学ぶ意欲が向上するということが明らかになった。

(2) 課題

生徒のもつ課題の解決において有効であると判断し、行った手立てについて以下の課題が残った。

ア 思考力、判断力、表現力について

- ・人に伝わりやすいように筋道を立てて論を展開させることについて指導が不十分であった。
- ・グループで推敲する活動が生徒同士の「いいところ探し」になってしまった。意見文を批評的に読むことができなかったため、効果的な推敲とならなかった。

イ 自ら学ぶ意欲について

- ・課題や学習の見通しに照らして学習を振り返る自己評価が形式的なものになってしまい、授業の中で効果的に働かなかった。

(3) 今後の取り組み

今後は前項の課題解決に向けて以下の実践に取り組んでいく。

- ・人に伝わりやすいように、筋道を立てて論を展開することについて指導する。
- ・グループでの活動を効果的に機能させるために、話し合いの方法を工夫する。またその際に他の人の意見を批評的に捉える活動を取り入れ、生徒が他の人の意見や考え、作品などを評価し、推敲を行う力をつける。
- ・授業の「問いの共有」の場面で、問題を提示した後、生徒たちに意見を出させながら学級全体で具体的なめあてを設定する。
- ・自己評価を行う際に振り返りの視点を生徒に与え、自分自身の学習を振り返って評価させる。

【参考文献・引用文献】

文部科学省（2008）：幼稚園、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）

文部科学省（2008）：中学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版社

文部科学省（2015）：教育課程企画特別部会 論点整理

エドワード・L・デシ リチャード・フラスト 桜井茂男（監訳）（1999）：人を伸ばす力 新曜社

北尾 倫彦・山森 光陽・鈴木 秀幸・金子 守（2011）：観点別学習状況の評価基準と判断基準中学校国語 図書文化

桜井 茂男（1997）：学習意欲の心理学―自ら学ぶ子どもを育てる 誠信書房

桜井 茂男（2009）：自ら学ぶ意欲の心理学 キャリア発達の視点を加えて 有斐閣

寺井 正憲 吉田 裕久 編著（2008）：小学校学習指導要領の解説と展開 国語編 教育出版株式会社

高知県教育センター（2016）：高知県授業づくり Basic ガイドブック～若年教員のための基礎・基本（小中学校編）～

栃木県総合教育センター 研究調査部（2011）：学ぶ意欲をはぐくむ―「学習に関するアンケート」を活用して―